

カラダ契約

～エリート御曹司との不埒な一夜から
執愛がはじまりました～

ととりとわ

Towa Totori



Eternity
BUNKO

目次

カラダ契約

〜エリート御曹司との不埒な一夜から

執愛がはじまりました〜

書き下ろし番外編

鬼の目にも孫

カラダ契約

〜エリート御曹司との不埒な一夜から

執愛がはじまりました〜

「それでは、あおい先輩の契約を祝って、かんばーい！」

「かんばーい！」

女性三人の黄色い声に続き、カチンとグラスの触れ合う音が店内に響く。

ここは都心のオフィス街の裏通りにある、落ち着いた雰囲気のある居酒屋だ。天井から吊るされた白熱球のほのかな明かりに、木目の腰壁、ダウンライトの降り注ぐバーカウンタートと、どこをとってもおしゃれのひと言に尽きる。料理もアヒージョやタコス、肉料理と種類も豊富なため、ごんまりした店内は若い人たちでいつも賑わっていた。

須崎あおいが勤めるフジチョウ建設は、ここから道一本隔てた国道沿いにビルを構えている。従業員数は千人ほどで、取締役は皆同じ姓。いわゆる同族経営の不動産建設会社だ。

短大卒業を機に入社したあおいも、来年の春には早くも勤続丸十年を迎える。三十路を目前に控えた現在は、資産運用部第二営業課の主任として邁進する日々だ。

「先輩、無事契約にこぎつけてよかったですねー！」

「まだ気が早いよ。契約するなんてひと言も言われてないのに」

隣の席でキャッキヤと喜ぶ先輩の咲良優愛に、あおいは苦笑いを浮かべた。

「でも、それまでは見積りすら出させてもらえなかったんだから、あとひと押ししてこじやないですか？」

いやいや、と向かいに座る同じく先輩の村本美尋が手を振る。

「違うんだなあ、優愛ちゃん。ここから先が長いんだって。しかも山田さんといったら大地主だもん。いろんな業者が足繁く通ってるんだよ」

「もう、そんなこと知ってますよ。せっかく喜んでるのに水を差すなんて、美尋さんひどーい」

プンスカと頬を膨らませる優愛の肩をあおいは優しく叩いた。

「大丈夫大丈夫、気にしないで。ほら、せっかくのお酒なんだから楽しくのもう！はい、かんばーい！」

手にしたビールのグラスを掲げてから、クーツとあおる。

ごくごくとのみ干すと、喉を駆け抜ける苦い泡がなんとも心地いい。やはりアルコールは最高だ。酒を覚えた二十歳の頃から種類を問わずいけるクチで、平日でも夕食前に必ず晩酌をする。最後に休肝日を設けたのはいつだったけ？と首を捻るほどだ。

今日この店にやってきたのは優愛の提案によるものだった。美尋の言う通り、まだ契約にこぎつけるかどうかも定かではないが、あおいにとつてみれば酒をのめるというだけでラッキーなのだ。何より優愛の気持ちは嬉しい。これで経費で落ちればなおいいのだが、部署の一部のメンバーだけの集まりではそういうわけにもいかないだろう。

料理が運ばれてきて、あおいは自ら後輩たちに取り分けた。

「はい、優愛ちゃん分。これは美尋ちゃんのね」

「わーい、先輩ありがとうございます。おいしそう〜」

箸を手に無邪気な笑みを浮かべる優愛に、あおいもつい相好を崩す。

二十五歳の彼女は見た目だけでなく、性格まであざとかわいいう後輩だ。今もお通しの魚の切り身を箸の先で小さくちぎり、口に運ぶと同時に「おいしい」と頬に手を当てる。

グラスにはピンク色のいちごソーダ。ちょこまかとした動きで箸を置き、『私かわいいでしょ?』とばかりに、ちびりとグラスに口をつける。

(ま、実際にかわいいんだけど)

優愛は顔がかわいくてスタイルがいいだけでなく、いつもおしゃれに気を使っている。胸まである髪を緩く巻き、今日はふわつとしたアイボリーのワンピースにもこもこのバッグといういで立ちだ。彼女はあおいと違って営業ではなく営業事務のため、服装はある程度自由が利く。この姿で彼氏がいないのは、きっと相当な優良物件を狙っている

のだろう。

(それに対して私の格好……!)

自分の姿を見下ろして思わず苦笑いを浮かべる。

仕事柄、地味な色のスーツを着ているのは仕方ないとして、長い髪を後ろで束ねただけのヘアスタイルはまるで就活生だ。担当する個人の地主は年配者が多いため、派手な服装や髪型はご法度。身長も百六十五センチと高いほうで、かわいげも色気の『い』の字もないと自覚している。

「ところであおいさん、おうちのほうは大丈夫なんですか?」

「んっ?」

正面から尋ねられて、パツと顔を上げた。

もぐもぐと口を動かしているのは、営業の後輩である美尋だ。ショートカットの彼女は元バレー部の体育会系で、見た目に違わずはつきりした性格をしている。

美尋は優愛より三年先輩の二十八歳。全体的に仲がいい営業部でも、このふたりとは特に馬が合い、よく一緒にのみにけたり、休日に買い物に出かけることもある。

あおいは箸を止め、口の中のをビールでのみ下した。

「弟には連絡したよ。ご飯はやっておくからゆっくりしてきなって言ってくれて、大人になったなーって感動しちゃった」

「ええ、素敵！」

優愛が目を輝かせて身を乗り出す。

「これはスパダリになること間違いないですね。いくつでしたっけ？」

「二十二。大学四年生だよ」

「妹さんは受験生でした？」

と、美尋。

「うん。来年の春に大学受験だよ。早いなあ」

「先輩の弟さん、私より三つ年下か……うん、アリですね！ 今度紹介してくださいよ」

「優愛ちゃんてば、がつつきすぎ！」

美尋が口を開けて笑い、あおいも一緒になって笑った。

あおいに両親はなく、現在は歳の離れた弟妹とアパートで三人暮らした。弟は七歳下の大学四年生、妹は高校三年生で、現在大学受験に向けて遅くまで塾に通っている。

両親が離婚したのは、あおいが十二歳の時だった。その後、母を病気で早くに亡くしたため、あおいがふたりの親代わりとなったのだ。

その頃妹はまだ小学生で、あおい自身も就職したばかりだったため本当に大変だった。授業参観や運動会、合唱祭や保護者会にも参加した。仕事の都合でどうしても学校に行けなかった時には、こっそりと泣いている妹に自分も涙したことがあった。

（それが今ではすっかり大人になっちゃって……）

今では週の半分は弟が食事を作ってくれる。営業の仕事は残業が多く、すべての家事までは手が回らないなか、ふたりが協力してくれるのが本当に助かる。学費を稼ぐのは大変だけれど、かわいい弟と妹のためなら頑張れるというものだ。

「ちょっと先輩」

トイレに行くと言って席を外していた優愛が、ぱっちりした目をキラキラと輝かせて戻ってきた。

「何？」

「隣のテーブル見てくださいよ」

「隣？」

「ダメッ！」

顔を向けた途端に腕を引っぱられる。

「そんなにガッツリ見ないでください！ ほら、向かって左奥にいる人、めちゃくちゃイケメンじゃないですか？」

あおいはおしほりを取るふりをしてちらりと横目で見た。すると彼女の言う通り、びっくりするくらいイケメンがいる。隣のテーブルはスーツ姿の男性が三人ばかり。だがその人からは、見る者すべてを惹きつけるほどのオーラがにじみ出ている。

その男性は椅子に座っていても、ほかのふたりより頭ひとつ分抜きんでていた。艶のある黒髪と、健康的に日焼けした肌。目元は切れ長の二重で、三白眼^{みたえ}ぎみの目力が強いタイプ。笑うと横に大きく広がる口元には、控えめなえくぼが浮かんだ。

「やば。めっちゃ腕太い。かっこいい〜〜!」

優愛はすっかり興奮した様子だ。なるほど、紺色のベスト姿の彼はブルーのシャツを肘まで腕まくりしており、筋肉質な腕に太い血管が浮き上がっている。肩幅が広く、胸板も厚い。

「ホントだ。あんなイケメン、この世にいるんだ」

と、美尋。

あおいの腕が優愛にがしりと掴まれた。

「ね？ ね？ 先輩もかっこいいと思うでしょ？」

「そ、そうだね。素敵な人だねえ」

確かにすこぶる見目麗しい男性だとは思うけれど、あいにくそれ以上の感情はない。すでに恋を諦めた身だ。最後に恋人がいたのは四年前で、それ以来合コンにも行かず、マッチングアプリも試したことがない。この先もずっと『おひとりさま』を貫くつもりである以上、恋愛感情は抱くだけ無駄だと思ってしまう。

それなのに、以前から部長にお見合い話を持ちかけられていて、近いうちに食事でも、

と言われているのだ。結婚は考えていないと何度言っても一向に取り合ってくれない。

(ああ、嫌なこと思い出しちゃった)

週明けにまた顔を合わせると思うとゾツとする。勢いに任せてビールをぐくぐくとあおった。

「いいのみっぷりだね」

頭上から降ってきた低い声に驚いて、あおいは目を開けた。その瞬間、視界に飛び込んできた端正な顔を見てしまう。

「大丈夫？」

目を白黒させて胸を叩くあおいのもとに、新しいおしぼりが差し出された。声をかけてきたのは例のイケメンだった。隣と向かいの席から、「キヤー」という黄色い声がある。「あ、ありがとうございます」

動揺するあまり、素っ気なく言っておしぼりを受け取った。普段話す男性は年配の地主や銀行マン、社内の人のどれかだから妙にドギマギする。しかもこんなみつともないところを見られるなんて……

ふ、と男の口がさらに横に広がった。男性的な口元にえくぼが浮かび、思いがけずドキツとする。

(あ、やっぱりかっこいいかも)

「泡、ついでるよ」

「えっ？」

慌てて手の甲で拭うと、男がくすくすと笑い声を立てた。彼がただ笑っただけで、その場がドラマのワンシーンみたいに見える。

（は？ なにこれ、モデルか俳優？）

こんなにスーツが似合う男性を見たのは初めてだ。スーツのベスト姿というのもポイントが高い。

男が目前のテーブルに手を突き、腕に走る太い血管がより浮き上がった。

「俺たち三人、男ばかりなんだけど、よかったら一緒にのまない？」

「えっ……一緒に、ですか？」

愛想よく言われて隣のテーブルを見ると、同じくスーツ姿の男性ふたりがこちらに熱い視線を送っている。手前にいるあおいをスルーして、彼らが見ているのは優愛だ。これはいつものお決まりのパターン。

（ははあ、ナンパか）

優愛はかわいいから、一緒に街を歩いていると彼女目当てで誘いがかかることがよくあるのだ。

きつとこのイケメン男性も同じだろう。あおいに声をかけてきたのは、この中で一番

年長者だからに過ぎない。

「ダメかな？」

再度請われて優愛と美尋を見ると、ふたりとも懇願するような顔つきでアイコンタクトを送っている。あおいは苦笑いを浮かべた。

「ダメ……じゃなさそうですね」

「ありがとう。じゃあテーブルくつつけようか」

男性グループが立ち上がり、テーブル同士をくつつけてひとつにした。彼らと店主が視線でやりとりしているところを見るに、どうやらあおいたちと同じく常連らしい。

「それじゃ、新しい出合いに」

「かんばーい！」

声をかけてきた男性の音頭で、会は仕切り直しとなった。まだ向こうも店に入ったばかりだったらしく、頼んだ料理が次々に運ばれてくる。目の前には、サラダ、焼き鳥、アヒージョ、グラタン、スティック春巻きと、様々な国籍の料理がずらりと並ぶ。

「今日はなんの集まりなの？」

「先輩のお祝いなんです」

イケメンの同僚らしき男性と優愛が話している。イケメンがこちらを見た。

「へえ、君、今日が誕生日？」

「いいえ、そういうわけじゃありません」

あおいはそう答えて、回ってきたメニユーに目を這はわせる。はじめに頼んだビールはもうのみ干してしまった。次は日本酒にしようか。

「皆さん、何かのみますか？」

ぐるりと見回すと、額を寄せ合ってメニユーを見ていた面々がパツと顔を上げる。

「俺、梅酒ロックで」

「私も！」

「自分はハイボールお願いします」

割合におとなしかったテーブルが、一気に賑やかになった。あたかも最初からこういう集まりだったかのよう。社交的なのは優愛や美尋だけでなく、男性チームのほうもらしい。

合計六人の大所帯になり、男女が隣同士になるように三対三で座った。端の席に座ったあおいの隣は二十代半ばくらいの茶髪の男性。向かい側の真ん中には優愛がいて、彼女の左隣、あおいの正面には例のイケメンが座っている。ほかのふたりよりも歳が近そうで、一番話しやすく感じた。

「皆さん同じ会社の方たちなんですか？」

あおいが尋ねると、イケメンが頷く。

「会社の同僚だよ。俺は横島蒼也よこしまさそうや。もうすぐ三十二歳です」

「ええ、蒼也さん若く見えますね！ 私は咲良優愛です。『優愛』って呼んでくださいね」
蒼也のほうに身体まで向けて目をキラキラと輝かせる優愛を見て、あおいは思わず頬を緩めた。

彼女の『私が一番かわいいアピール』を嫌う人もいるが、あおいはこの潔さを買っているのだ。

「優愛ちゃんか。かわいらしい名前だね」

「そうですかあ？ 蒼也さんも素敵な名前ですよ」

「そうか？ 初めて言われたけど」

ふたりのあいだ——だけ——で進むやりとりを、あおいはあたたかい気持ちで見守った。

合コン相手のうち、もっとも見た目のいい男性と優愛がいい雰囲気になる——これもいつものお約束。それに甘えん坊の彼女には、ずっと年上の人が合う。

（いいね、いいね。このままくっついてもいいのよ）

にこにこ笑みを浮かべつつ、運ばれてきた日本酒をちびりと啜すする。喉を滑り下りる熱と、鼻に抜ける華やかな香りが堪たまない。

グラスを傾かたむけつつ蒼也の様子を窺うかがって見たが、彼はなかなかの好人物のようだ。この

時間になってもパリッとしていて疲れた様子はない。顔はテカッていないし、歯も白く、爪は短くカットされている。

『いつかお見合いおばさんになるのが夢』

普段から、あおいはそう公言して憚らなかつた。恋をした時のときめきは嫌いじゃないけれど、嫉妬やヤキモキする気持ちには疲れてしまふ。きつと恋愛に向いていないのだ。それなら他人の恋を応援するほうがずっと楽。

「もう日本酒いつてるんだ。イケるクチだね」

蒼也がテーブルの上で腕組みをしてこちらに身を乗り出している。

「君の名前は？」

「須崎あおいです」

「あおいさんね。お酒好きなの？」

「好きですねえ。榎島さんも好きそうですよ」

あおいは視線で蒼也の手元を示した。彼の手にはウイスキーのロックグラスがあり、そろそろ中身が尽きようとしている。テーブルをつけた時にはお通ししかなかったから、本当に入店してきたばかりだったのだろう。それでウイスキーをロックでいくのは、のめる証拠だ。

蒼也は伶俐な目を細めて、ニッと笑った。

「今日はウイスキーの気分だったけど、日本酒も好きだよ。この前出張先でのんだ酒がうまかつたなあ。『豊饗』っていうんだけど、知ってる？」

「あ、なんか聞いたことあるかも。新潟の大吟醸じゃないですか？」

「そうそう！ さすが詳しいな」

わーっと手を叩いて盛り上がっていると、優愛が蒼也にもたれかかって巻き髪をこすりつけた。

「先輩ばっかり喋ってずる〜い。いいなあ、私もお酒いっぱいめたらいいのに」

「優愛ちゃんはかわいいからのめなくていいの。いちごソーダ、おかわりする？」

あおいが首を傾げて尋ねると、優愛が「う〜ん」と同じポーズをした。

「でも、そんなにのんだら酔っぱらっちゃうかも〜」

「酔っぱらつていいよ。俺が送っていくから！」

調子よくオオカミ役を買って出たのは、あおいの隣の席の茶髪の男性だ。いちごソーダのグラスを手にした優愛の目は、ちらちらと蒼也を見ている。

「ええ〜、ホントに？ でも、送ってくれるなら蒼也さんがいいかも〜」

「マジかよ〜つれねえ」

ガクツとうなだれる男性を見て、蒼也がククツツと笑う。

「お前な、のめない子に無理やりのませるのはよくないぞ。ここはのめる者同士の一騎

打ちといこう。な？」

蒼也の形のいい目があおいを捉えた。箸で摘まんでいた春巻きを落としそうになり、慌てて左手で受け止める。

「はい？ え？ 私？」

「そう。あおいさん、俺とのみ比べしない？ でないと、かわいい後輩ちゃんが獐猛なオオカミたちの餌食になるかもな」

(なんて？)

にやりと意地の悪い目で見下ろされた途端、あおいの闘争心に火がついた。後輩の貞操を盾に勝負をしかけるなんて卑怯ではないのか。

しかし、これがまさしく飛んで火にいる夏の虫。これまでにも、あおいがイケるクチだと見た同僚や上司の誘いを何度か受けたことがあるが、のみ比べで負けたことは一度もない。

あおいは、すつくと立ちあがった。

「その戦い、受けて立とうじゃありませんか」

ふんふんと鼻息荒くスーツの上着を脱ぎ捨てる。周りのメンバーからは、やんややんやと囁し立てる声が。

蒼也が楽しそうに笑った。

「いいね、その気っ風のよさ。君が得意な酒でいいから」

「それじゃあ日本酒で」

「了解」

あおいが選んだ酒を、彼の後輩がふたつ注文した。ふたりともいい大人だから、バカみたいなのみ方はしない。一杯ずつ、特に時間制限を設けずに、最終的に空けたグラスの数で競おうと決めた。

優愛の采配で握手を交わす。

「それじゃあいいですかあ？ よーい、スタート！」

蒼也と目で合図を交わし、あおいはグラスを啜った。中身はぬる爛だ。蒼也は冷やで。この店の日本酒は少し辛口ですつきりとのみやすく、塩辛などの塩分の高いつまみをアテにグイグイいけてしまうから危ないのだ。

「あおいさん、ググつといっちゃってくださいー！」

「ダメダメ、美尋ちゃん。ペース守らないと意外とのめないんだよ」

「そっだよ。ほら、みんなも見てないで。食べて飲んで、パーッと騒ごう」

蒼也に促されたメンバーは、それぞれ楽しそうに酒をのみだした。それでいてあおいと蒼也もサシのみになることはなく、ちょこちょこ会話に加わる。

男性たちから『部長』と呼ばれているところを見ると、蒼也はふたりの上司のようだ。

この若さで部長だなんて、あまり規模の大きくない会社なのだろうか。

「この砂肝うまいよ。ここに来るといつもこれ頼むんだ」

蒼也が差し出した皿の砂肝を、あおいはパクッと頬張る。

「ほんとだ、おいしい。榎島さんの会社はこの近くなんですか？」

「そうだよ。君のところも？」

「ですね。だからこの店へはよく来ます」

「名刺交換は……しなくていいな」

スーツのポケットに手をやりかけて止めた蒼也に、あおいはウンウンと頷く。

「そういうの持ち込みたくないですよね」

「同感。君とは気が合いそうだ」

彼は意味深に目を細めたが、おそらく社交辞令だろう。会う女性みんなに使う営業トークで、ボクシングのジャブみたいなもの。

相手に合わせて社交辞令で返すのは、ビジネスにおける基本中の基本だ。そこに本心は必要なく、相手もそれとわかっていて合わせてくれる。営業の仕事は日々化かしあい、あおいは互いをタヌキと思っているくらいだ。

ちよつと小首を傾げつつ、あおいは上目遣いに彼の目を見た。

「私も榎島さんとは気が合いそうだと思います。年齢も近いですし」

「それは光栄の至りだな。——すいませーん、冷やでお代わり」

かしこまりました、と厨房で声がする。

「ぬる燗もお願いしまーす！」

あおいも手を挙げて声を張った。

「さすが速いね。大丈夫？」

蒼也はからかうような口ぶりだ。腹の中では感心しているのか、驚いているのか。それとも引いているのか……微妙な表情だ。

「全然ですよ。榎島さんものでしょう？」

「俺も全然。蒼也でいいよ」

「わかりました。蒼也さんと呼ばせていただきます」

にやりと唇の端を上げた彼の口元にえくぼが浮かぶ。それがなんとも魅力的で、これは本当にモテるだろうな、と感心する。

「明日になっても、俺の名前忘れないですよ」

「大丈夫です。酔っぱらってもイケメンは忘れませんから」

その後も化かしあいの応酬をしつつ、あおいは順調に杯を重ねていった。途中からグラスではなく一升瓶に切り替え、ふたりとも手酌でのみ進める。カウントしているのは酒に弱い優愛だ。

一般人からすると相当速いペースだろうけれど、あおいにしてみればこれが普通だった。これまでの対戦相手は四杯目あたりから徐々にペースが落ちていったが、蒼也は見事に食らいついでいる。

優愛の手元をちらりと見たところ、ナプキンに書かれた正の字の数は、あおいが六、蒼也が五。

(なかなかやるじゃない)

でも、悪いけれど負ける気がしない。あおいはひと晩で一升半空けたこともある猛者だ。男性では時々いるけれど、女性でそこまでのめる人は滅多にいないと聞く。

酒の強さもさることながら、これまで蒼也と話していて感じるのは、徹底的に『手慣れている』ということだった。

相手の素性を聞かないし、自分も聞かれたこと以外は答えない。『年齢が近い』とあおいが言ってもつられなかった。

女性に年齢を尋ねるのは失礼と言いつつも、相手側から振られたら普通はそれとなく尋ねるものだ。そこから共通の話題で盛り上げて距離を縮め、あわよくば、という流れが定石である。

あおいのことがまったく眼中にないか、純粹に今を楽しもうとしているだけなのか。恋愛はしたくないと言いつつ、後者であってほしいと願うのはわがままだろうか。

ほぼ互角かと思われた戦いは、勝負が始まってから二時間が経つ頃、唐突に終わりを迎えた。蒼也が『参った』と言ったのだ。

「あゝ、勝てると思っただけだなあ。強すぎるだろ」

彼は両手で頭を抱えて天を仰いでいる。本当に悔しそうだ。顔色はまったく変わっていないけれど、少しだけ呂律がおかしいような気もする。

あおいはテーブルに手つき、丁寧に頭を下げた。
「勝負ありがとうございました。蒼也さんもすごかったですよ。私が今までに対戦した人の中で一番強かったかも」

それに楽しかった。会話もよく弾んだし、最後までおいしく酒がのめたからだ。

「え？ 勝負あったんです？ どっちが勝ったんですか？」

優愛がバツとこちらを向いた。のんだ数をカウントしていたはずの彼女は、途中から審判そっちのけで向こうの会話に夢中になっていたのだ。

あおいはガッツポーズを取ってみせた。

「優愛ちゃんのこととは私が守ったからね！」

「あおいお姉さま、素敵〜〜！」

互いに伸ばした両手を握り、きゃあきゃあと声をあげる。

「盛り上がっていると悪いんだけど、そろそろ店を出ようか。あんまり長居しちゃ悪

いし」

「じゃあ私たちも」

蒼也が伝票を手に会計に向かったため、あおいも彼に続く。立ち上がった彼は見上げるほど背が高かった。バレエシューズを履いているあおいの目線が、彼の肩甲骨のあいだにある。おそらく一八五センチくらいか。

蒼也の大きな背中の陰からレジを覗き、思わず笑ってしまった。表示された金額はたった六人でのんでいたとは信じがたいものだった。どちらもなかなか音を上げずに杯を重ねた結果だ。

「部長、経費で落ちますか？」

後ろからこそそこそとやってきた部下の男性に、蒼也が唇を曲げてみせる。

「ダメだな。ここ最近経理がうるさいんだよ。お前らふたりとも四千元な」

たはー、とうなだれて戻っていった男性が、テーブルで代金を徴収している。

「じゃ、私の分はこれで」

あおいは財布から取り出した一万円札二枚を泣く泣く差し出した。わけあって、あおいの懐具合は同年代の女性と比べるとかなり苦しい。今日はたまたま銀行から生活費を下ろしたばかりだったため、財布にたくさん入っていたのだ。

「悪い。あとでいい？」

蒼也は長財布をジャケットの内ポケットにしまい、テーブルに向かった。

「みんな帰るぞー」

「はーい」

蒼也の指示に従って、全員がぞろぞろと店をあとにする。優愛と美尋までが彼の部下みたいだ。

「はい、さっきのお金」

店を出たところで、あおいは折りたたんだ一万円札を蒼也の胸に押しつけた。なんとなく受け取ってくれない予感を感じていたが、案の定、彼は駅のほうに足を向ける部下たちを見送っていて気づかないふりをしている。

「そ、う、や、さん」

一万円札を握った手でトントンと彼の胸を叩く。蒼也はやれやれといったふうにごちらを見た。

「じゃあ五千円だけもらっていいかな」

「そんなわけにはいきませんよ。私のほうが多くのもんでるんだし」

「勝負を持ちかけたのは俺のほうだよ」

ポケットに両手をしまい込んだ蒼也が目じりを下げる。

これは本気で受け取らないパターンだ。たった数時間前に出会って、たまたま一緒に

のんだ人にそこまでしてもらう理由がない。

「じゃ、あおいさん。お先に帰りまーす」

声がして振り返ると、美尋が手を振っている。

「あ、うん……！ 気をつけてねー！」

「お前から送りオオカミになるなよ！」

蒼也が店の前から動きもせずに、彼らの後ろ姿に声をかけた。

「私も帰らなきゃ！ 先輩、これから蒼也さんとはしごしたりしませんよね？」

男性のひとりに腕を取られた優愛が、後ろ髪を引かれるようにあおいたちを振り返る。

「しないから安心して。ほら、早く行かないと電車なくなっちゃうよ！」

「ヤバイ、ヤバイ！ お疲れ様でーす！」

優愛がばたばたと走っていき、店の周りがやっと静かになった。実家暮らしの彼女は家が遠く、宴会の途中で先に帰ることが多いのだ。

彼らの姿が見えなくなると、あおいはくると振り返って代金を突き出した。

「はい、蒼也さん。受け取ってくれないと本当に困ります」

「今度会った時でいいから」

蒼也が薄く笑みを湛えてあおいの手を押し戻す。あおいはため息をついた。

「またそんなこと言って。次にいつ会えるかわからないでしょう？」

「そうか。それは困るな。じゃあ今からちよつとだけ付き合ってよ」

「はい？」

しばらく押し問答したのち、なんだかんだと言いくるめられて、気づけばタクシーに乗っていた。

十分ほどタクシーの後部座席で揺られてやってきたのは、繁華街の裏通りにある落ち着いた雰囲気のパール。看板らしい看板もなく、こんな店よく知っているなあ、と感心する。

目立たない木製のドアを開けると、カウンターの中间にあるマスターが小さく頷いた。

店内は薄暗く、木目と黒を基調とした内装が大人っぽい。こぢんまりした店内にはスローテンポのピアノジャズが流れている。

客はまばらで、男性のふたり組とひとり客が数人いるだけだった。皆静かに酒を楽しんでおり、口髭を生やした中年のマスターが熟練した手つきでシェイカーを振っている。

蒼也がボックス席に着き、あおいはその隣に座った。座席はL字型になっているため、小さな声でもじゅうぶん会話ができてそうだ。

「こういうお店、初めて来ました」

あおいは両手を膝に置き、蒼也の耳元に囁いた。借りてきた猫みたいな気持ちだ。会社の同僚と仕事帰りにのむのは居酒屋と決まっっていて、こういう静かなバーは緊張してしまう。

蒼也は笑い、テーブルに両肘をついてあおいの顔を覗き込んできた。

「強いからひとりでこういう店に来るのかと思ってた。で、何にする？」

「えーと、おすすめはなんですか？」

「んー……せっかくだからテキーライっとく？ 明日休みだろう？」

「土日休みです。蒼也さんも？」

「そうだよ。じゃ、決まりだな」

蒼也が手を挙げると、カウンターの前にいた女性店員がやってきた。黒色のベストにパンツ、えんじ色のネクタイをしている。

注文から五分と経たずにグラスがふたつ運ばれてきた。琥珀色の液体が満たされたショットグラスの上にはライムが載せられ、グラスのふちに塩がついている。

「はい、乾杯」

「乾杯」

ライム片手にグラスを指先で持ち上げる蒼也に、あおいも做う。テキーラは過去に一度のんだだけで、作法もよく知らない。蒼也の真似をして一気にグラスをあおり、すぐさまライムをかじる。

「んー」

喉を駆けおりの刺激が日本酒の比じゃない。口から胃にかけてカッと熱くなり、目を

ばちばちとしばたたく。

「効くなあ。久々にのんだ」

「いいですね。もう一杯いきたくります」

「いくか？ いこう」

蒼也が店員を呼び、今度はつまみになるものも頼んだ。あまり頻繁に呼ぶのも悪いので、テキーラは一度に三杯頼む。

二杯目をのんだあたりで、なんだか気持ちが高くなってきた。

「ああ、おいしい。楽しいなあ……」

はーっと息を吐き、すでにかじつてあるライムをチュツと吸う。あおいの家はここからそう遠くないため、終電まではあと一時間ほどある。ここまでのんでしまったからには、時間いっぱいまで酒を楽しみたいところだ。

蒼也が頬杖をついてこちらを見る。

「本当、うまそうにのむよな。やつぱり君とは気が合いそうだ」

「まだわかりませんよ。お互い何も知らないわけですし」

「知りたいと言ったら？」

思いがけず蠱惑的な目で見つめられて、あおいの心臓がドキンと跳ねた。きれいな二重脣にすっと通った鼻筋。ふっくらと濡れた唇。滅多にお目にかかれないような美丈夫

の視線が、あおいの顔のパーツの上を行ったり来たりしている。

(えっと、これは……まさか、口説こうとしてる?)

ふっ、とあおいは噴き出した。

「そういう冗談はシラフの時に言うものですよ。ほらほら、蒼也さんもつとのんで」
 かんばしい、と勝手に三杯目のショットグラスを鳴らして、琥珀色の液体を喉に流し込む。ああ、最高だ。こうしてずっと朝までのんでいたい。

蒼也も三杯目のショットグラスを素早くあおった。その前にちよつと不満げに唸るような声が聞こえたが気のせいだろう。イケメンはそんなこと言わないし、だいいち彼のような男は優愛みたいなかわいい子を選ぶはずだ。

瞼を刺激する明るい日差しが、あおいをまどろみの世界から呼び起こそうとしている。いつもと違う部屋の匂い。温度。湿度。肌に触れる上質なりネンの正体を知りたいよ
 うな、もうしばらく寝ていたいような……

住み慣れた自分の部屋にはやけに明るかった。休日はゆっくり寝ていたいから遮光カーテンをぴっちり閉めて布団に入るのに、昨夜は忘れたのだろうか。酔っぱらってそのまま眠ってしまったとか……? :

「う……ん? ……んんツ?」

パチツと目を開けて頭を起こす。ベッドのスプリングが揺れた。いつも寝ているせんべい布団ではないことに気づき、違和感のある自分の身体を見下ろしてみる。

「……えっ。えっ? えっ? ええっ? 嘘。何が起きた?」

がばりと飛び起きて自分の身体を呆然と眺める。未だ状況が読めないながらも、大変なことをしでかしたのはすぐにわかった。身体を覆うものが、小さな布切れひとつない。念のため、おそるおそるベッドの脇にあるごみ箱を覗いてみると――

「ひゃあーッ!!」

そこにあつた情熱的な一夜の残骸に、素早くベッドに突つ伏す。

やってしまった。

やってしまった。

しかも避妊具が三つも。ちよつと盛りすぎなのでは!?

(嘘でしょ? 信じられない……! この世に生まれ落ちて約三十年。真面目に地味に生きてきた私が、行きずりの男とワンナイトだなんて……!!)

「ううう、ちよつと、ちよつと……」

裸のままうずくまり、シーツを握りしめてぶるぶると震える。テキーラを四杯のんだところまでの記憶は確かだ。そのあと五杯目を頼んだところで記憶がブツリと途切れ
 ている。

いや、こんなことをしている場合だろうか。

「……って、ここどこなの!? ——いたあっ!」

慌ててベッドから下りようとしたら、シートが脚に絡まって転げ落ちた。

「いったい……もう!」

起き上がってバッグを探そうと一歩進み、引き返してシートを身体に巻きつける。もしかししたら、まだ部屋のどこかに昨夜のお相手がいるかもしれない。お相手といっても、それが誰なのか想像に難くないのだけれど。

窓際のソファの上に、ページジュのバッグが置いてあった。あおいが着ていた服も丁寧に畳んである。スマホを取り出してマップを開くと、ここが会社と自宅とを三角で結んだ一角であることがわかる。

「セレネタワートウキョウ……?」

ズームしたところ、どうやらシテイホテルの一室のようだ。

それがわかったところでようやく気づいたが、室内はびっくりするくらいに豪華だった。ベッドはクイーンサイズで、藍色を基調としたシンプルなデザイン。壁と、チャコールグレーのソファと椅子。壁のテレビモニターは六〇インチだろうか。すべてのインテリアが都会的で、洗練されている。カーテンの隙間からちらりと見えるのは、目もくらむような都会のビル群。

おそらくラグジュアリー感を売りにした高層階のダブルルームなのだろう。窓に近寄れば朝日を浴びる高層ビルを睥睨できそうだ。

服の上には昨夜渡せなかった二万円が置いてあった。このホテル代も出してもらったのだろうし、ずいぶん借りができてしまったようだ。『今度会った時』なんて言っていたけれど、次に会ったらいくら返せばいいのかと考えただけでゾツとする。

洗面所も浴室も覗いてみたが、お相手のイケメンはもういなかった。連絡先を書いたメモもなければ、名刺もない。本当に一夜限りの、後腐れのない行為だったのだろう。

「慣れてるんだなあ……」

なんとなくがっかりしている自分に驚いた。未だ身体の奥に残る余韻からして、優しく抱かれたことは疑いようもない。何から何まで完璧なあの人を、一周回って尊敬する思いだった。

あおいが暮らすアパートは会社から電車で二十分の距離にある。さっきまでいたホテルからも二十分。地下鉄で自宅に戻った時には、午前十時を少し回っていた。

駅から歩いて十五分の静かな住宅街にある、家賃十万円の古い3DK。これがあおいたち家族の城だ。

「ただいま……」

あまりにばつが悪くて小声でそろりとドアを開ける。いつもならチャイムを鳴らすところだが、今日は鍵を開けて入った。いつの間にか帰っていた体を装うつもりだったのに、妹の楓が部屋から飛び出して来る。

「お姉ちゃん！ おかえり。どこに行ってたの？」

「あ、ああ、えーと、飲み会のあと後輩のお宅にお邪魔して泊まらせてもらって……」
「後輩って誰？ 優愛ちゃん？ いいなあ、私も行きたーい！」

顔を輝かせて腕を組んできた妹を、やりわり押し戻す。普段からスキんシップの多い姉妹だけど、今日はダメだ。男の匂いがついているかもしれない。

「あなたは受験生でしょ」

「ええ、ケチだなあ。おねえ顔赤いよ。まだ酔ってんじゃないの？」

「姉貴はのんだって赤くならないだろう？」

ダイニングキッチンから訳知り顔で出てきたのは弟の漣だ。大学に入ってから急に大
人びた弟は、サークルの飲み会だ、バイトだ、クラブだ、と毎日忙しくしている。

あおいはハツとした。

（まさか、漣はすでに女の子と……？）

エプロン姿でニヤニヤしている漣。昨夜あおいが行きずりの男と一夜をともしたことに気づいている、とでもいった表情だ。

「あんだ、気をつけなよね」

「何が」

「その……女の子といろいろ……間違いを起こさないようにさ」

漣は笑いながらダイニングキッチンへ戻り、慣れた手つきで鍋を火にかける。

「そういうことする時はちゃんと対策してますって。オカンかよ」

「オカンで悪かったわね。心配もするよ。私はあんだたちの母親みたいなものなんだから
後ろからやってきた楓が、ボンとあおいの肩を叩く。」

「ちゃんと模試でA判定ももらってるから。優愛ちゃんのお宅訪問の件、よろしくね」

「はいはい、前向きに検討します」

「あーっ、その言い方！」

「姉貴、しじみの味噌汁のむだろ？」

「もちろん」

漣に言われて振り返る。お椀わんに注がれた湯気の立つ味噌汁のおいしそうなこと。楓は
部屋に戻ったようだ。

「おいしそう。漣はやっぱ気が利くわ。何から何までやってくれてありがとう」

「いいよ。のんだ翌朝はしじみの味噌汁って決まってるから、昨日の夜作っておいたんだ」
得意げに胸を反らす弟が頼もしい。立ったままひと口啜ると、のみすぎて疲れた胃に

塩分がしみわたる。

「ああ、おいしい。幸せ……」

漣が火を止めてお椀をもうひとつ取り出す。

「俺もこれから朝飯なんだ」

「じゃあ一緒に食べよっか」

脱いだスーツの上着をダイニングの椅子に掛け、冷蔵庫から作り置きのおかずと漬物のタッパーを取り出した。毎日こんな感じで、あおいはもう十年以上も賑やかな家族の『お母さん』をしている。最近ではふたりが手を離れつつあるのがちよつと寂しい。ふたりの結婚式ではきつと泣いてしまうだろう。

月曜の朝はちよつぱり憂鬱な気持ちで迎えた。外は冷たい雨模様で、玄関脇のコート掛けから、晴雨兼用の紺色のコートを取って羽織る。

つい先日まではブラウスにカーディガン一枚で過ごせたのに、十一月も下旬となるとさすがに寒さも増してきたようだ。来月はもうクリスマス。バイトや遊びに忙しい漣はともかく、今年は楓と家で過ごすことになりそうだ。

（髪を下ろすのなんて久しぶりだなあ）

狭い玄関でパンプスを履き、壁にかかった鏡で前髪を直す。いつもはゴムでひとつに

縛るだけの髪を、今日は下ろしてみたのだ。明るめの栗色をした髪は自毛で、学生時代は『染めているんじゃないか』と先生によく怒られた。くるとカールしたくせ毛の先を指で弄る。

髪を下ろしたのは、何も特別な心境の変化があったからじゃない。寒くなってきたから、といえはそうだし、同じ髪型に飽きたからともいえる。自分では、ただなんとなくのつもりだけれど、優愛には何か言われるかもしれない。

「うーん……」

（やっぱり結んでいこう）

手首にはめてあったゴムで、いつもどおり緩めに結ぶ。

「漣ー？ 行ってくるねー」

ダイニングのドアが勢いよく開いた。弟は今日、午後からの講義らしい。

「行ってらっしゃい。別に帰ってこなくてもちゃんとやっとかから」

ドアから顔だけ出した弟はニヤニヤしている。笑いながらパンチを食らわす手ぶりをして、あおいは外に出た。

フジチョウ建設の最寄り駅から職場までは、普通に歩いて八分で着く。いつもよりのんびり歩いて到着し、ゆっくと階段を上って資産運用部のある五階に着いた。

きよるきよるとあたりを見回し、目の前にある給湯室へ飛び込む。後ろ手に閉めたドアにもたれかかり、ホッと息をついた。

「よかった……！ ふたりに会わなかった」

ふたり、とはもちろん優愛と美尋のことだ。金曜の夜、あんなふうに着た蒼也と最後まで残っていたのだから、『あの後どうなったのか』と絶対に聞かれるだろう。適当にサクッとのもんで帰ったと言えは済む話だが、嘘をつくのはあまり得意ではない。

「わっ」

その時、急にドアが開いて後ろに倒れそうになった。

「先輩……！ びっくりしたあ！」

「びっくりはこつちだよ。……って、寄りかかった私が悪いよね。ごめん」

やってきたのは優愛だ。今日もきれいに巻いた髪に、ほわほわした起毛がかわいらしいピンクのニットを着ている。

優愛が給湯室に入ってきてドアを閉めた。

「私のほうこそごめんなさい。それで、それで？ あのあとどうなったんですかあ？ もしかしてお持ち帰りされたとか!?」

「う……」

茶色のカラコンを入れた目をキラキラと輝かせる優愛に、あおいは尻込みした。赤面

しそうな予感をして、急いで背を向けて棚からマグカップを取り出す。

「お、お持ち帰りなんてされるわけないでしょ。コーヒーでいい？」

「お願いします。え、でもいい雰囲気だったじゃないですか」

「そんなことないよ。あれからちょっとお酒のんで終電で帰ったけど、連絡先すら交換しなかったし。ほらほら、もう始業時間だから行こう」

「ごめん！ と心の中で謝る。でも、連絡先を知らないのは嘘じゃない。蒼也にとつては本当に興味がなかったのだから。」

「咲良ー、どこ行ったー？」

コーヒーを手に給湯室のドアを開けると、課長の岩本いわもとが優愛を呼ぶ声が聞こえてきた。「ヤバッ。課長に呼ばれてるんだった。請求書の金額が違ってたって、めちゃくちゃ怒ってるんですよ」

優愛が廊下に出しかけていた足を引っ込める。

「訂正すればいいんじゃないの？」

「それが、先方に送ったあとで発覚したみたいで……」

「うわ……一緒に怒られようか？ 一応営業部の主任だし」

「やったあ、先輩優しい〜」

優愛が甘えた声でしなだれかかってくる。

「咲良」

岩本が急にドアの前に現れたため、優愛が飛び上がった。

「課長……！」

「お前また須崎に甘えようとしてるな？ 須崎もダメだぞ。お前が庇ってたらいつまでたつてもひとり立ちできないだろ。はい、おいで」

クイクイと厳しい顔つきで手招きされて、優愛が泣きそうな顔で岩本についていく。

「先輩、さっきのことあとでまた教えてくださいね！ 約束ですよ〜！」

振り返って手を振る優愛を、あおいは苦笑いとともに見送った。この部署で唯一彼女のかわいさにほだされないカタブツの課長は、あおいあまり得意ではない。でも今は、ちよつと救われた気分だった。

「おはようございます」

挨拶とともに部署へ入ったあおいは、コーヒーをデスクに置いてからロッカーにコートとバッグをかけて戻った。今日は例の地主にパンフレットとプレゼン資料を持っていく日だ。積算部に依頼した概算の見積書ができるまでに数日かかるため、熱が冷めないように顔を繋いでおく必要がある。

地主の山田氏は一般的な商業ビルの線で考えていたようだが、対象の土地が駅から少し離れた幹線道路沿いにあるため、複合商業施設を提案した。土地の広さも容積率も申

し分ない。

あおいとしては、スーパーと衣料品店、スポーツジムの三階建てがいいように思う。小さなスペースが残ったら歯医者やリズム教室、塾などを入れてもいいかもしれない。

敷地内には芝生の広場を設けて、そこでイベントを開いたりキッチンカーを呼んだりできるという。きつと家族連れで賑わうことだろう。

（家族連れか……いいなあ）

複雑な家庭に育ったあおいは、家族揃ってどこかへ出かけた思い出がほとんどない。唯一記憶に残っているのは、弟と妹が生まれる前に一度だけ連れていってもらった遊園地。

その頃の両親はまだ仲がよく、夏休みの自由研究で賞を取ったご褒美にとねだったのだ。あおいが思春期に近づくにつれて母と父のあいだには喧嘩が増えていったけれど、父の様子がおかしくなる前はそれなりに幸せだった。

（あ……）

幸せそうな家族を思い浮かべると、なぜか蒼也の顔が頭に浮かんだ。背が高く体格のいい彼なら、私服も素敵だろう。意外と小さな子を抱えている姿も様になるかも……

「先輩。せーんばい！」

肩を叩かれてびくりとする。優愛が戻ってきて隣の席に座った。

「おかえり。お説教終わったの？」

「やっと終わりましたよ〜。先輩がボートとするなんて珍しいですね」

「お疲れ様。ちょっと考えごとしちゃって」

ふふ、と笑ってごまかしつつ、資料の印刷ボタンをクリックする。

あのワンナイトの翌朝から、蒼也のことがたび頭にチラついて困っていた。風呂に入っている時も、食器を洗っている時も、通勤のあいだにも。それでも脳内で勝手にリフレインされるのがベッドシーンではなく、楽しく酒をのんだ時のやりとりであることには安心感を覚えていた。

(考えてみれば、あの遊び人がいいお父さんになるはずがないしなあ)

勝手に漏れ出したため息は、何を血迷っているのか、という自分への戒めだ。確認を終えたプレゼン資料の印刷を続けながら、優愛のほうに身体を寄せる。

「ところで課長、大丈夫だった？」

「大丈夫じゃないですよ。課長ったら、めちゃくちゃ言い方キツイんです。さっきだって、私のことをチャラチャラしてサボってばかりいるって……」

「そっかあ、大変な目に遭ったねえ」

すんすんと鼻を吸り出した優愛に、ポケットから取り出したハンカチを渡す。

「須崎、優愛ちゃんを泣かすなよ」

「え？ 私？」

茶化してきたのは、後ろを通りかかった同期の男性だ。ちょっと傷つきながらも、あおいはヘラヘラと笑った。

「ごめんね、優愛ちゃん。あとでおいしいものご馳走ちせうするから。ね？」

「ホントですか？」

優愛がハンカチの上から上目遣いに見る。

「お前がちゃんと守ってやれよ」

「だよね」

さっきの同期がまだそこにいたらしい。追い打ちで煽あおってくるあたり、さすが同期なだけに遠慮がない。

あおいは優愛の肩に優しく手をかけた。

「今度は私がチェックするから、遠慮なく持ってきて」

「でも、それじゃ先輩の仕事が」

「それくらい余裕はあるから大丈夫。もっと頼っていいんだよ」
すると、優愛がニコツとかわいらしい笑みを浮かべる。

「わかりました。これからもよろしくお願いします、先輩！」

後輩の朗らかな笑みにほだされて、あおいもついデレデレと頬を緩めた。年下の甘え

に弱いのは昔から。こんなだから、真面目な課長から時々怒られてしまうのだ。

「さーて。仕事、仕事」

回収したハンカチをポケットにしまい、プリントアウトの作業を再開する。これをホチキスとテープで製本してプレゼンに使うのだ。

本当は自分もこんなふうに住らされてみたいが、さすがにこの歳になったら甘えは許されない。なんなら新入社員の頃から『しっかりしてるね』『強いから大丈夫だよ』と言われてきて、庇われたことなんて一度もなかった。

うーん、これが女子力の違いというやつか……

(まーいっか、お仕事頑張るぞ！)

「なるほどね。商業ビルはいくつか持つてるから、こういう複合施設みたいなのも面白そうだなあ」

地主の山田氏はそう言って、革張りのソファに身を預けた。山田氏は還暦を迎えたばかりだというが、髪はフサフサ、小柄だが腹も出ておらず若々しい。

ここは都内某所にある山田邸の応接間である。間口の広い土塀の中央にある門をくぐり、広い庭の奥に位置する立派な建物が、この屋敷の母屋だ。

都内にしては広すぎるくらいの敷地には、趣のある離れや茶室がある。つい先ほどは

趣味の陶芸部屋を見せてもらい、本格的な窯かまやろくろに驚いたものだ。

この屋敷に来るのは楽しいけれど、同時に緊張もする。あおいはソファの上で脚をぴつたりと閉じ、両手を膝の上で重ねて首を垂れた。

「ご興味を持っていただいて嬉しいです」

はは、と山田氏が苦笑いを浮かべて顎をかく。

「いやね、実を言うとほかのビルのテナントが空いちちゃって、なかなか決まらないんだよ。この土地もねえ、遊ばせてるくらいなら何かに利用したいけど、これ以上リスクは負いたくないじゃない」

「それは当然のことです。その点、スーパーは地域に根差した施設ですし、山田様のお土地の周りには現在、競合する大規模な商業施設はありません。こちらのご提案ではサブリース方式で建築費もかかりませんし、毎月決まった額が入金されますのでリスクも少ないと思います」

へえ、と目を輝かせた山田氏が前傾姿勢になる。

「お宅の会社で借り上げてくれるの？」

「当社にはリース専門の部門がございます。こちらの資料をご覧ください」

お茶を横にずらして、持参したプレゼン資料を広げる。タブレットも立ち上げ、あらかじめキープしておいたウェブ上の参考になりそうなサイトも開いた。

(でも、手応えはバッチリだな)
 契約に結びつくかどうかは別として、ここまで具体的な話ができたのは初めてだ。あ
 おいの提案に山田氏も興味を持ったようだったし、これはもしかすると、もしかする
 かもしれない。

ニヤニヤ笑いを顔に張りつけて、芝生を踏まないように飛び石の上を慎重に歩く。
 そのせいだろう。正面から歩いてくる人に気づかなかったのは。

「ずいぶんと上機嫌だな」

(はい?)

びっくりして足を止め、顔を上げた瞬間にあんぐりと口が開いた。

「あーっ!」

目の前に立っているのは、つい先日酔ったはずみでベッドをともしたお相手、槇島
 蒼也だった。先日とは違うダークカラーのスーツにシルバーのネクタイ、きっちりとセツ
 トした黒髪からデキる男の匂いが芬々と漂っている。

あおいの態度が面白かったのか、彼はブツと噴き出して口元を押さえた。

「あつ、あつ、ああの……こ、こんなにちは」

「か噛んだ。思い切り噛んだ。でも、カーツと頬が熱くなったのは噛んだせいじゃない。

(ちよっ……なんで赤くなんのよ!)

立ち読みサンプル はここまで

三十歳手前にもなって、たかがセックスした相手に赤面するなんて恥ずかしい。

「君も山田さんのところに来てたんだ。フジチヨウ建設の須崎あおいさん」

「は……? え? なんで私の会社を知ってるんですか?」

「と蒼也が怪訝けげんそうに眉を寄せる。

「この前、君が教えてくれたんだろう」

「私ですか?」

あおいは首を捻ったが一秒後には思い出した。あの日のことを何も覚えていないこと
 を思い出したのだ。

気まずい思いでバッグの中に手を突っ込む。

「先日は失礼しました。お金、お支払いますので」

「おいおい。こんなところで出すなよ」

蒼也に手を掴まれたあおいは、財布を掴みかけた手を引っ込めた。確かに客先の敷地
 内でこんなことをするのはいかなものか。

苦い顔をした蒼也がため息をつく。

「いらないうって言ったのに。どうしても気が済まないようだな」

「当たり前です」

「結構。でもおかげでまた会う口実ができたよ」